

代替敷料利活用の取組み

- 業者よりお茶がら(ウーロン茶、ソバ茶、緑茶)を敷料として使ってみないかとの話があり、使用を開始。業者が静岡県、茨城県、栃木県から集めたお茶がらを100円/m³で購入。
- 肥育豚舎では、おが粉(80m³/週)、お茶がら(40m³/週)、戻し堆肥(40m³/週)を敷料として利用。敷料は少なくなったら適宜追加、出荷後、全交換。夏はおが粉の使用量が減り、時期によってはおが粉を全く使わずに、お茶がらのみで済むことも。なお、繁殖豚舎では敷料は使用していない。
- お茶がらは、おが粉(1,000円/m³)の1/10程度の価格で入手可能で、脱臭効果もあるが、その一方、お茶がらは、水分含有率が70%と高いため、敷料の交換頻度が高くなる傾向がある。
- このため、運送業者と相談し、トラックの荷台に網状の台を設け、お茶がらに含まれる水分が、輸送中に網を通過して下に抜けるように工夫。



敷料の導入



敷料の様子

堆肥化工程

お茶がらとおが粉の混合したものと、戻し堆肥を交互に敷き、豚自らが敷料を攪拌。

3×6mに16～18頭の密度で飼養。敷料の厚みは30cm程度。

- 豚舎よりバケットローダーで搬出(12t/日)。
- ダンプで堆肥化施設へ運び、攪拌堆肥舎(スクリュー式、深さ1.5m、幅8m、長さ50m×2棟)で、冬は1ヶ月、夏は1週間程度攪拌。
- さらに、完熟堆肥舎で2ヶ月間完熟し完成(6t/日)。
- 完成した堆肥は近隣の畑作農家(ピーマン、アスパラ)へ無料で提供。
- お茶がらから作られた堆肥は、臭気がなく、農家からも好評。



攪拌堆肥舎(スクリュー式)



バケットローダー

